

「国民楽派」再考 —— チェコ国民史の最後の砦？

福田 宏

はじめに

報告の目的：国民形成の主題に基づく変奏曲（variations）

言語、文学、歴史、知の体系（博物館など）、体操、音楽、建築、絵画 etc.

芸術は神聖不可侵にして犯すべからず？ ～ ex. NHK の壁

Th. アドルノは罰当たりな哲学者？ ← ドヴォジャークを「退化」と断罪

Basso Ostinato（執拗低音）としてのオリエンタリズムと社会ダーウィニズム

1. 巨大な問題設定：「長い19世紀」における音楽

A. 「公共性の構造転換」（ハーバーマス）と音楽

代表的具現の公共性から市民の公共性へ

宮廷・オペラハウスからコンサートホールへ（バロックから古典・ロマン派）

B. 産業化とブルジョア家庭の親密圏

ピアノという工業製品と楽譜出版技術、そして「良家の娘」

バダジェフスカの《乙女の祈り》（1859）と《かなえられた祈り》

C. J. S. バッハの復興運動と「教養市民層」の挑戦 ～ 「そこに山があるから」

《マタイ受難曲》の蘇演（1829）→ 音楽の「享受」ではなく「理解」！

音楽批評という「カンニングペーパー」を熟読しつつ、コンサートを聴く

D. 「上からの」近代化と「大衆の国民化」

日本における音楽取調掛おんがくとりしらべがかりの誕生（1879, M12）← 東京芸大の前身

日本国民の健康と道徳のために唱歌を歌わせる

E. 国民形成と国民楽派：「遅れてきた国民」の専売特許？

チェコ、ノルウェーのグリーグ、フィンランドのシベリウス、露の5人組

ドイツの3B、フランスの「国民音楽協会」（1871）、そして日本

オリエンタリズムの眼差し → 自らのエキゾチズムを強調

2. スメタナ — 「想像の共同体」としての《わが祖国》

A. 1848年革命とチェコ国民のマニフェスト

ハプスブルク帝国におけるチェコ人とフランクフルト国民会議

F. パラツキー（1798-1876）によるハプスブルク帝国再編論

B. スメタナ（1824-84）もバリケードに参加 → チェコ国民としての「覚醒」

B. イェテボリにおける「自分探し」の旅？ ← 娘3人を幼くして亡くす

ピアニスト、そしてリストのような交響詩作曲家を目指す

1860年代におけるハプスブルク帝国の変化 → 二重主義と立憲主義

故国への帰還 → チェコ音楽の模索 → 《売られた花嫁》（1866）の大ヒット

C. 「チェコ的なもの」とシェークスピア生誕300年祭（1864）

普遍的理念のフランスと土着的要素のドイツ：フィヒテの心変わり？

チェコ国民にとってのシェークスピア → 「未成熟な」国民のツール？

真のチェコ音楽とは？ → 近代化と進歩か、それとも民謡の引用か？

D. 国民楽派という拘束衣 → より大きなコンテクストへの解放

Charles Burney（1726-1814）「ヨーロッパのコンセルヴァトワール」

モーツァルトと同時代の作曲家 → ブリクシヤミスリヴェチェク

ヴァーグナーやブラームスと同時代の作曲家 → スメタナやドヴォジャーク

3. ドヴォジャーク — 進歩と退化のはざままで

A. ドヴォジャークの成功物語と「辺境」民族の文明化

肉屋の息子（9人兄弟の長男）→ 才能を見いだされる → ブラームスの評価

ピアノ連弾《スラヴ舞曲集》が空前の大ヒット → ニューヨークの音楽院へ

ケンブリッジ大より名誉博士号（1891）：「ボヘミアの片田舎」から出世！

B. 「辺境」民族の進歩なのか、それとも、音楽の退廃を招く疫病神か？

社会ダーウィニズムにおける「辺境」民族の文明化

結局は「上から目線」？ → ドヴォジャークはキャリバンに過ぎないのか

ドヴォジャークの「分かりやすさ」が嫌われたのか？

アドルノにとっての退化 → 「流行歌のパッチワーク」のような音楽へ

C. 激烈なるスメタナ＝ドヴォジャーク論争

音楽学者 Z. ネイエドリー（1878-1962）の活躍とドヴォジャークの悪夢

最初はドヴォジャーク派が優勢、後にスメタナ派が巻き返す展開

国民楽派とは、エスニックな素材を近代的手法で料理すること？

D. ドヴォジャークの虚像と実像 — 隠された病？

スメタナのドイツ語とドヴォジャークのチェコ語 → 創られたイメージ

ドヴォジャークのホームシックとアルコール依存症？

一人では外を歩けない大作曲家 → 広場恐怖症とパニック障害の兆候

おわりに

オリエンタリズム批判における音楽の位置づけ → サイードの忘れ物？

研究の方向性 → 他者に対するオリエンタリズム：《蝶々夫人》などのオペラ

自己に対するオリエンタリズム：国民楽派の自虐性？

いわゆる社会ダーウィニズムと音楽（ダーウィン、スペンサーの音楽論）

チェコ地域出身の Richard Wallaschek（1860-1917）と未開社会音楽論

チェコ社会にグンプロヴィチ（1838-1909, cf. 小山哲）的学者はいたか？

参考文献（最近の動向を示すもの・邦語を中心に）

- Benjamin Curtis, *Music makes the Nation: Nationalist Composers and Nation Building in Nineteenth-Century Europe* (Cambria: Amherst, 2008).
- Christopher P. Storck, “Die Symbiose von Kunst und Nationalbewegung: Der Mythos vom ‘Nationalkomponisten’ Bedřich Smetana,” *Bohemia* 35:2 (1994), pp.253-267.
- 伊東信宏編『ピアノはいつピアノになったか』大阪大学出版会、2007年。
- 大角欣矢「チェコ『国民楽派』考」『チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 2004年日本公演』（プログラム冊子）、2004年。
- 岡田暁生『音楽の聴き方—聴く型と趣味を語る言葉』中公新書、2009年。
- 片山杜秀『音盤考現学』アルテスパブリッシング、2008年、他多数。
- 内藤久子『チェコ音楽の歴史—民族の音の表徴』音楽之友社、2002年。
- 同『ドヴォルジャーク』（作曲家◎人と作品シリーズ）音楽之友社、2004年。
- 同『チェコ音楽の魅力—スメタナ・ドヴォルジャーク・ヤナーチェク』東洋書店、2007年。
- 松本彰「19世紀ドイツにおける男声合唱運動—ドイツ合唱同盟成立(1862年)の過程を中心に」姫岡とし子他『ジェンダー』(近代ヨーロッパの探究 11) ミネルヴァ書房、2008年。
- 宮本直美『教養の歴史社会学—ドイツ市民社会と音楽』岩波書店、2006年。本書の書評については、<http://hfukuda.cool.ne.jp/review/review0603.htm>
- 吉田寛『ヴァーグナーの「ドイツ」—超政治とナショナル・アイデンティティの行方』青弓社、2009年（未読）。
- 渡辺裕『歌う国民—唱歌、校歌、うたごえ』中公新書、2010年。
- 福田宏『身体の国民化—多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会、2006年。
- 福田宏、大塚直彦、藤井健吉「クラーク会館のパイプオルガン—総合大学におけるリベラルアーツの可能性」『北大百二十五年史 論文・資料編』2003年、pp.448-483。
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/22528>
- 福田宏『『国民楽派』を超えて—近代のチェコ音楽とは?』『フィルハーモニー』76巻2号、2004年9月、pp.23-27。 <http://hfukuda.cool.ne.jp/muzika/muzika09.htm>
- 同「スウェーデンにおけるスメタナと交響詩—国民楽派の前と後」『フィルハーモニー』80巻8号、2008年10月、pp.25-28。
- 同『『国民楽派』再考—想像の共同体としての《わが祖国》』『フィルハーモニー』81巻2号、2009年2月、pp.31-38。
- 同「遅れてきた野獣—ヤナーチェクの愛・信仰・愛国心」『フィルハーモニー』81巻10号、2009年12月、pp.19-24。
- 同「進化と退化のはざま—ドヴォルザークの『親しみやすさ』と苦悩」『フィルハーモニー』82巻5号、2010年6月、pp.40-45。 <http://hfukuda.cool.ne.jp/muzika/muzika13.htm>
- チェコ音楽に関する詳細な文献一覧については、<http://hfukuda.cool.ne.jp/smetana.htm>、<http://hfukuda.cool.ne.jp/janacek.htm>、<http://hfukuda.cool.ne.jp/dvorak.htm> を参照。

年表

- | | |
|-------|---|
| 1814年 | ウィーン会議。1821年、メッテルニヒの宰相就任 |
| 1824年 | スメタナが生まれる（以下、Sと記す） |
| 1836年 | バラツキー、『ボヘミア史』刊行開始（1867年に全5巻完結） |
| 1841年 | ドヴォルジャークが生まれる（以下、Dと記す） |
| 1848年 | 1848年革命。Sも革命運動に参加 |
| 1851年 | シルヴェスター勅令。「有機的」新絶対主義の時代へ |
| 1853年 | D、ドイツ系の実科学校に進学。翌年、肉屋の資格を取得 |
| 1854年 | ヤナーチェクが生まれる（以下、Jと記す） |
| 1856年 | S、イエテボリに向かう。当地で指揮者・ピアニストとして活躍 |
| 1859年 | 対イタリア戦争の敗北、政治改革の開始 |
| 1860年 | 十月勅書。1861年に二月勅令。立憲体制の模索 |
| 1861年 | S、チェコに活動拠点を戻す。チェコ系『国民新聞』創刊 |
| 1862年 | 国民仮劇場開幕。D、同劇場のヴィオラ奏者。S、チェコ語の日記開始 |
| 1866年 | 普墺戦争での敗北。S、チェコ国民仮劇場の首席指揮者に就任 |
| 1867年 | S、オペラ《ボヘミアにおけるブランデンブルク人》の成功 |
| 1867年 | アウスグライヒ（和協）。オーストリア=ハンガリー二重帝国への再編 |
| 1873年 | D、作曲家としての最初の成功。翌年、国家奨学金を初めて授与される |
| 1874年 | S、聴力を完全に喪失。国民自由党（青年チェコ党）設立会議 |
| 1878年 | D、《スラヴ舞曲集》の出版 |
| 1879年 | S、《わが祖国》全曲の完成。ターフェ内閣成立、「鉄の環」連合 |
| 1881年 | 国民劇場の柿落してSの祝祭オペラ《リブシェ》初演 |
| 1882年 | ブラハ大学がドイツ語部門とチェコ語部門に分割 |
| 1884年 | S、精神病院にて死去。D、最初のイギリス訪問 |
| 1891年 | ブラハで産業博覧会。チェコ経済の強さを内外に示す |
| 1892年 | D、ニューヨーク・ナショナル音楽院の院長に就任。95年に完全帰国 |
| 1893年 | D、交響曲第9番《新世界より》作曲 |
| 1897年 | バデーニ言語令事件。チェコ人とドイツ人の民族対立が深刻化 |
| 1904年 | D、死去 |
| 1907年 | 帝国議会に男子普通選挙導入 |
| 1911年 | スメタナ派とドヴォルジャーク派の激しい論争（1914年頃まで）
D派の歓喜の大合唱 → S派の「ドヴォルジャークはもう沢山だ！」 |
| 1914年 | サラエヴォ事件と第一次世界大戦勃発 |
| 1916年 | J、オペラ《イエヌーフア》のブラハ初演。62歳にして有名となる |
| 1918年 | ハプスブルク帝国の解体。チェコスロヴァキアの誕生 |
| 1928年 | J、死去 |